50周年記念インタビュー

# 戦争と専制政治から新しい時代へ

## 平和と民主主義が輝く社会でこそ医療が生きる道

名誉理事長
玉川和隆氏（91）

50年前、協会の立ち上げに奔走した7人の歯科医師がいた。その一人が玉川和隆名誉理事長（91）だ。1971年の創設から84年まで代表を務め、その後も理事・相談役として協会の活動を見つめてきた。創設時の歯科医療界の状況や、協会が果たしてきた役割、今後の協会活動への期待などについてインタビューした。（新聞部長・矢部あづさ）

### 時代は〝脱保険〟

――創設した頃の歯科医療界の状況を教えてください。

戦後復興のなかで歯科医療界に大きな変化・進歩が現れた頃です。切削器具がエンジンからタービンに切り替わり、「ナソロジー（咬合学）」なる言葉が広まりました。アメリカの最新の歯科医療を吸収しようと各地でスタディーグループが生まれ、近代歯科医療の到来のごとく喧伝されました。

同時に、70年代の日本歯科医師会の〝脱保険路線〟に象徴されるように、多くの歯科医師は低診療報酬の保険診療ではなく、自由診療の拡大に活路を見出そうとしていた時代でした。

――なぜ協会を立ち上げようと思ったのですか。

我々の世代は、いわゆる戦後民主主義世代。新しい日本をつくっていこうという気風のなか、民主化運動や平和運動、学生運動の高まりとともに青春時代を過ごしました。

開業後は押し寄せる患者に長時間の診療を余儀なくされ、専門的な研究や勉強はおろか、病気になっても休養すらできない状況でした。低診療報酬にも矛盾を感じ、「歯科界を何とかせないかん」と思っている時に全国保険医団体連合会の準備段階の保険医団体連絡会に誘われたことがきっかけです。

そこでは全国保団連をつくる中心になっていた大阪医科の桑原康則先生や稲次直巳先生、京都医科の中野信夫先生らと接し、「国民医療の充実をめざす人々の〝燃えるような志〟に強い影響を受けました。

### 100人で発足

――それで協会の創設へ動き出したわけですね。

66年7月、歯科医師会城東区支部の同じ班だった林和也先生と古田光行先生と協力し、茨木市の4人と梅田観光会館で集まったことが発端です。

協会はどういう組織で、何を目指すのか、何回も会議を開いたことを覚えています。

「保険診療を重視し、社会保障の拡充によって歯科医療を発展させる」という考えは、当時の歯科医療界では異端でした。それでも「歯科保険医の生活と権利を守る自主的な組織が必要」との確信がありました。

自由診療への激しい徴税攻勢も始まっていましたので、税務や社保の講習会を開きながら賛同者を集めていったのです。

――5年の準備を経て71年4月18日の結成総会を迎えた時の心境は。

100人の会員を得て、「やっと出発点に立つことができた」と身が引き締まる思いでした。京都に次ぐ全国2番目の歯科の保険医協会でした。

歯科医師会で力を発揮していた辻本勇男先生や岩田了吉先生らが運動を引っ張っていくべきだと考えていましたが、なぜか私に代表幹事のお鉢が回ってきました。自分では組織的・理論的にリーダーの能力はないと思っていましたので、「4～5年でもっと偉い人が中心に座ってくれるだろう」と行きがかり上、引き受けたのです。

その後、13年にわたって代表を務め、保団連の歯科協議会の会長まで務めることになるとは考えもしませんでした。振り返れば、私のような若輩者を選出したことに組織の発展の条件があったのだと感じています。

### 協会方針が脚光

――7年後には会員数が1000人を超えました。協会の何が会員を引きつけたのでしょうか。

一つは、徴税攻勢への反撃です。74年に大阪国税局が歯科医師に対し、「不正申告がある」として集団的修正申告を強要しました。協会は各地で緊急の学習会を組織、納税者の権利として会員を守るとともに、会員外の先生を救済する対策を示したことで、〝頼りになる協会〟のイメージが定着しました。

もう一つは、歯科医療をめぐる情勢の変化です。歯科治療への需要が高まる一方、歯科医師不足から供給が追い付かない状況に加え、高い治療費に国民の歯科不信はピークに達していました。いわゆる「差額徴収問題」です。

75年の大阪府消費者団体連絡会との会談には、数台のテレビカメラが入り、「保険診療で国民歯科医療を守る」ことを掲げた協会の方針が脚光を浴びました。歯科医療の矛盾を解決する運動の必要性が客観的な事実として浮かび上がり、まさに協会の出番が到来したのです。

前進を続け、会員数1340人で迎えた10周年のレセプションは記憶に鮮明に残っています。府歯会長、与野党4人の国会議員、医科協会の桑原理事長、協同組合の稲次理事長ら130人を超える出席者で盛大に開かれ、協会の輝ける一日に望外の喜びを感じたものです。

――50年を振り返って伝えたいことは。

協会の10年、20年、40年の記念誌をひも解く時、多くの方々の参加と協力、奮闘に感謝をせずにはいられません。会員、事務局員、顧問関係、共闘団体関係などを数えると、協会と関わりのある方は数万人に及ぶのではないでしょうか。全ての人が協会をつくり、支え合い、今があると思います。

世界に例を見ない医科・歯科一体の保険医運動は大きな発展を遂げてきました。10万7千人の保団連、そして全国の医科・歯科保険医協会の運動に学び連帯し、平和と民主主義が輝く社会でこそ医療が生きる道であることを50年の歴史のなかで学びたいものです。



# 写真で見る協会50周年

スタート

1971年4月18日

「大阪歯科保険医の会」を結成。代表に玉川和隆氏を選出

1975年3月31日

国民の不満が爆発した「差額徴収問題」で厚生省と交渉

1980年11月22日

府歯会長や国会議員らが多数参加した10周年記念レセプション

1984年7月28日

健保法改悪に反対し、協会役員が御堂筋をデモ行進

1991年9月29日

創立20周年の「いま生きるフェスティバル」に2700人

1992年11月21日

全国に先駆けて「保険で良い入れ歯を」大阪連絡会を結成

1993年2月21日

個別指導で保険医が自殺した問題で模擬指導を実演

1999年11月6日

いい歯の日にちなみ「歯科なんでも電話相談」を開設

2000年10月中旬～下旬

電車の中吊り広告で高齢者の1割負担導入に反対をアピール

2001年11月17日

医療改悪断固反対を掲げ、扇町公園に7200人が結集

2004年11月28日

日常臨床交流会を初めて開催し、会員・スタッフらが演題発表

2005年11月8日

医療研究集会に過去最高の1400人。アグネス・チャンさんが講演

2006年3月21日

新点数中央説明会に過去最高の2000人が参加

2009年4月23日

レセオンライン義務化の撤回を求めて大阪地裁に提訴

2010年5月29日

全国で6番目となる「保険でよい歯科医療を」大阪連絡会を結成

2011年4月9日

東日本大震災で宮城県石巻市の避難所を訪問し、歯科医療支援

2012年8月15日

学校健診後治療調査で子どもの口腔崩壊の実態を浮き彫りに

2013年3月1日

保険業法の改悪以来7年ぶりに休業保障の募集を再開

2015年7月8日

「戦争の血で白衣を染めさせない」と街頭宣伝で安保法に抗議

2018年6～9月

地震・豪雨・台風が相次ぎ襲来し、会員の見舞い訪問に奔走

2020年10月1日

「『大阪都構想』では命守れない」と医療関係4団体がアピール

2020～21年

コロナ禍で会員支援に全力